

The Realities of the Music Group that Aims at the Volunteer Work : from the Fieldwork of the Music Bell Group

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/29493

ボランティアを目的とする音楽グループの実態： ミュージックベルグループのフィールドワークから

人間社会環境研究科 客員研究員

西 島 千 尋

The Realities of the Music Group that Aims at the Volunteer Work: From the Fieldwork of the Music Bell Group

NISHIJIMA Chihiro

要旨

西洋中心主義から文化相対主義へ転換が図られ、音楽の分野ではクラシック音楽だけでなく各々の国や地域に固有の文化や伝統の音楽もそれぞれに価値を保有していると見なされることとなった。クラシック音楽の価値はその「美」に、文化や伝統の価値は人々のアイデンティティの形成にあると考えられている。しかし、クラシック音楽や、文化・伝統以外の音楽活動についての社会的な評価は曖昧である。その一つが、音楽療法や音楽ボランティアグループの実践である。

音楽療法や音楽ボランティアに共通するのは、双方が比較的新しい形態の音楽活動であり、クラシック音楽のコンサートのような不特定多数との関係を前提としていないということである。そうした音楽のあり方は、今も根強く残るパターンリズム——国家や専門家があらかじめ適切であると思われるものを選んで国民に提供する——の枠組みには収まりきらない。そのために当事者らの意図とは異なる見方（「趣味・習い事の延長」）が当てはめられる傾向にある。しかし、音楽療法や音楽ボランティアのような活動の実態こそが、長年、文化政策および教育において音楽のあり方を膠着化させてきたパターンリズムを考え直すべきものとして写し出すと考えられる。

だが、音楽療法および音楽ボランティアはまだ新しい分野であり、特に音楽ボランティアグループの活動についての研究はほとんど行われていない。そこで本論文では、2007年3月～2011年3月に行った音楽ボランティアグループリンベルを対象としたフィールドワークをもとに、不特定多数の関係を前提としない音楽活動の実態を表面化させる。そのうえで、音楽ボランティアに関わる人々が、「音楽」のみでも、「ボランティア」のみでもない、「音楽ボランティア」に感じるやりがいをも明らかにし、脱パターンリズムの再考への一考察とする。

キーワード

音楽ボランティア、パターンリズム、西洋中心主義、文化相対主義、文化ボランティア

Abstract

It is believed that classical music's value lies in its "beauty" and that values of the culture and its tradition form its identity. However, social evaluation of other music activities such as music therapy and music volunteer groups has not been undertaken,

even though these activities have recently proliferated.

These musical activities do not conform to cultural paternalism. They raise the question whether the nation or the specialist should present art to the people, challenging the traditional cultural policy about music education. Thus, the recent activity of music therapy and music volunteer groups sparks a debate.

However, little research has yet addressed the practice of music therapy and music volunteer groups. Therefore, I conducted fieldwork to examine the practice of music volunteer groups. In this study, I clarify the motivation of group members on the basis of the information derived during the fieldwork. I also discuss the contrast between the specialist-driven music presentation model and traditional paternalism.

Key Words

music volunteer, paternalism, west-centricity, cultural relativism, cultural volunteer

序

西洋中心主義から文化相対主義へという思想的な転換が図られて久しく、文化政策や教育が「文化」や「伝統」を対象とする傾向が強まっている。音楽の分野では、クラシック音楽だけでなく、各々の国や地域に固有の文化や伝統の音楽もそれぞれに価値を有していると思なされることとなった。その「価値」の根拠に、文化や伝統がアイデンティティの形成と結びついているということを指摘できるだろう。

ここでは詳しく述べないが、長い間、クラシック音楽の価値はその「美」にあると考えられてきた。一方、文化や伝統は、それに携る人々がアイデンティティを見出すことができるという側面が強調されている。A. ローマックスはアメリカの連邦政府および地方の音楽に関する予算の90%が「高級芸術の伝統を支援」するために使われていることに対して、「土地の音楽の自立」を訴えていた[ローマックス2007:309]。A. メリアムが述べるように「その文化を構成している人々の価値観、態度、信念により形成される」ことにこそ価値があると考えられているのである[メリアム1980:18]。

また、ユネスコが1982年に開催した世界文化政策会議以降、「文化」は「人びとの精神性や価値観

を表現する無形文化遺産」をも含むとの解釈が促進され、文化遺産を「文化の象徴として、国家統一のためやアイデンティティの形成・確立、そしてその促進・向上のために役立たせること」が注目を浴びるようになった[愛川2010:1]。

しかし、「美」を認められているクラシック音楽や、地域的なアイデンティティと結びつく文化や伝統以外の音楽活動についての認識は曖昧である。その一つが、音楽療法や音楽ボランティアグループの実践である。音楽療法は1950年頃から欧米で注目を浴び、組織の結成や音楽療法士の認定制度がすすめられた。日本でも1955年以降から活動が行われていたが、1995年に全日本音楽療法連盟が発足し(臨床音楽療法協会と日本バイオミュージック学会が統合、2001年「日本音楽療法学会」と名称が変更)、1997年から音楽療法士の認定を開始している。しかし、療法の効果を客観的に評価する基準は「希少であり確立されているとは言えない」という現状がある[小林・岡部2006b:77]。音楽療法士らは、音楽療法の国家資格化および医療機関での音楽療法の保険点数化を国に働きかけてきたが[岡部・小林2006a:72]、実現には至っていない。

また、新聞などでは様々な音楽のグループ(プロ、アマ問わず)が老健施設を訪れ、ボランティア演奏を行ったなどの記事を頻繁に目にする。だ

が一方で、そうした活動は「趣味・習い事の延長」と見なされる傾向にある。筆者が4年間にわたりフィールドワークを行ってきた音楽ボランティアグループリンベルも、こうした風潮の中で活動を続けてきたグループである。

音楽療法や音楽ボランティアに共通するのは、音楽を人と人との直接的な関わり的手段と捉えていることであると言えよう。そうした音楽のあり方は、今も根強く残るパターナリズム——国家や専門家があらかじめ適切であると思われるものを選んで国民に提供する——の枠組みには収まりきらない。そのために当事者らの意図とは異なる見方（「趣味・習い事の延長」）が当てはめられるのではないだろうか。

政策やスローガンが先行して「文化」「伝統」が新たに作り出されている状況には、「心のふるさとに仕立て上げ」られているという批判がつきまとう〔八木1994:24〕。それにもかかわらず「文化」「伝統」が重視されているのは、その真正性より、人々がそこにシンパシーを感じて集い活動できるという事実ゆえであると考えられる。J.ブラッキングは、自身のフィールドワークの経験から、「彼ら（筆者注：ヴェンダの人々）が音楽と呼んでいる音響パターンは、まず、それを運用する社会集団が存続していることと、次に、その集団の成員が相互に関係しあうやり方とに基づいて生み出される」ことを報告している〔ブラッキング1974:44〕。「集団の成員が相互に関係しあう」という事こそが「文化」「伝統」の求心力となっていると言えるのではないだろうか。

一方、クラシック音楽の最も一般的な場であるコンサートでは「不特定」な関係が前提となる。『音楽大辞典』には演奏会の基本的特質の一つに「不特定な「聴衆」を対象として働きかけ」ることがあげられている〔西浜1991:258〕。また、クラシック音楽の根幹を成す楽譜は、本来、再現するために多数の人間を必要とするもののために考え出された記号であった〔Goodman1976:121〕。その記号の存在が、人手不足の際に呼ばれる「トラ」（エキストラ）たちとの当日限りの演奏を可能に

している。それほどに、クラシック音楽は奏者、聴衆ともに不特定多数によって担われうる分業の要素が強い。

そうした不特定の関係性はパターナリズムによってより波及したと考えられるが、音楽療法や音楽ボランティアの現場は「音楽をきっかけに人と関わりたい」という直接的な関係性を求めているのである。音楽療法も音楽ボランティアも、音楽の活動形態としては比較的新しい。しかし、こうした新たな活動が、長年、文化政策および教育において音楽のあり方を膠着化させてきたパターナリズムを考え直すべきものとして写し出す。

一方で、音楽療法および音楽ボランティアはまだ新しい分野であり、特に音楽ボランティアグループの活動についての研究はほとんど行われていない。そこで本論文では、2007年3月～2011年3月に行った音楽ボランティアグループリンベルを対象に行ったフィールドワーク（活動拠点である福祉センターでの定期的な練習に加え、外部での演奏に同行）をもとに、不特定の関係を前提としない関係における音楽活動の実態を表面化させたい。

第1章ではリンベルの概要を、第2章ではリンベルの音楽ボランティアとしての活動の特徴を記述し、「結」でパターナリズムの観点と音楽ボランティアという活動の形態との間にある齟齬を整理する。

1. 音楽ボランティアグループリンベルの概要

リンベルは、富山県高岡市の音楽ボランティアグループである。母体は平成4年に設立されたB会というグループであった。B会は、病院受付介助や小児病棟の訪問、福祉マップの制作、車椅子の介助など多様なボランティア活動を行っていたが、徐々に3つの部会にわかれて活動するようになった。1つは病院ボランティアを主とするH会、もう1つは福祉マップの制作を主とするM会、そしてリンベルである。リンベルはその後、B会から独立した団体として活動を開始すること

となった。B会もメンバーは全て女性であり、リンベルもメンバーは全員が女性である。女性であることを条件に設けているわけではないが、設立以来、男性のメンバーの加入はない。

B会では年々、車椅子介助のボランティアが活発になり、県外の旅行への同行なども行っていた。しかし、車椅子介助には相当の体力を要する。メンバー自身らが年をとるなかで（現在のリンベルの平均年齢は68歳）、車椅子介助のボランティアを主として活動していくことに不安が見え始めた。年をとっても続けられるボランティアをと考えていた矢先の平成11年、市が企画したクリスマスのイベントで、ミュージックベル（青銅製のハンドベルをモデルに、鉄や真鍮製で作られた安価な楽器）を演奏したことがきっかけとなりリンベルの活動がスタートした。

当初のメンバーの中でクラシック音楽の演奏経験がある、つまり、ある程度の読譜能力のあるメンバーは2人だけであったが、読譜の経験がなくても可能ではという推測からミュージックベルが選ばれたという。当時の高岡市では、三味線、合唱、オカリナ、二胡などの演奏を行うボランティア団体が活動していたが、それらと異なる演奏をしようという気持ちもあったようだ。その珍しさもあり、多い月には毎週のように、老健施設やその他のイベントで演奏活動を行うようになった。メンバーの知人などから依頼を受け、今では老人会の催しや仏教婦人会、農業協働組合（JA）、市のイベントなど多様なイベントに出演している。

リンベルのメンバー

先にも述べたように、リンベルのメンバーは全員が女性で、58歳から76歳までのメンバー15名で構成されている。両親の看病や介護、娘の出産や生まれた孫の世話、メンバー自身の健康などの事情により数ヶ月から数年、活動を休止するメンバーもいる。しかし、ここ数年は常に15名程度のメンバーで活動を行っている。

現在、仕事を持っているメンバーは2名いるがパートタイムの形態であり、フルタイムで仕事を

しているメンバーはいない。かつて仕事を持っていたメンバーも現在では退職している。その仕事も、自営業の事業主、資格をもつ専門職、議員と様々であり、ずっと専業主婦だというメンバーもいる。家族構成も、4世代同居家族のメンバーもいれば、1人暮らしのメンバーもいる。このように、メンバーは様々な背景をもっているが、共通しているのは、ボランティアと音楽の双方に関心があるということである。

15名のメンバーのうち13名がリンベル以外のボランティア活動を行っている。子育てセンターでのサポーター、防犯、シーツ交換、体操、ヘルスボランティア、独居老人とのふれ合い活動、介護相談員、食生活改善推進員、コーラスボランティア、観光ボランティアなど、複数のボランティアを行うメンバーも少なくない。B会から活動が続いているメンバーも7名所属しており、ボランティア活動に関心が高いグループであると言える。

また、「なぜリンベルに加入したのか」と尋ねると、「ミュージックベルは活動として珍しい」「年をとっても演奏できる」「今はダンスを習っているが歩行が困難になってもミュージックベルなら続けられる」¹⁾「娘が嫁ぐ前はよく一緒に合奏をしていたが嫁いではからはそのような機会がなくなり、それに代わる活動をしたかった」と様々な答えが返ってきたが、「音楽が好きだったから」という答えはほとんどのメンバーに共通していた。B会からのメンバー以外の比較的新しいメンバーの中には、実際にリンベルの演奏をきいて感動したから加入したというメンバーが3名いる。

現在、メンバーの募集は行っていない。基本的に1つの音を2名のメンバーが担当し（ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シの7音に各2名）、あとの1名は欠席者を補充している。保有するベルの数が限られており、これ以上メンバーが増えると常に誰かが手持ち無沙汰になることが懸念されるためである。

また、「習い事」に熱心なメンバーも多く、8名のメンバーが民謡やカラオケ、茶道、華道、フォークダンス、社交ダンスなどの教室に通って

いる。

ボランティアグループとしてのリンベル

リンベルは、音楽ボランティア以外のボランティア活動も行っている。官民間問わずボランティアが対象の助成を申請する際に、演奏活動のみのグループは助成対象と見なされない傾向があるからである（リンベル結成以前からの知人・友人から依頼があるという理由もある）。近年、盛んになっている美術館やコンサートホールでボランティアを行う「文化ボランティア」（後に詳しく述べる）に対して「自己利益に収束してしまいかねない」といった指摘がなされることがある〔美山1998：8〕。たとえば、クラシック音楽の好きな人が、コンサートホールでチケット販売のボランティアに参加すると、「趣味と実益を兼ねた」行動であると考えられるのである。リンベルのように、ボランティア自身がパフォーマーとなる場合はさらに「習い事」の延長と見なされる傾向が強い。そのため、車いす介助や老健施設でのイベントの補助なども行い、「ボランティア団体」であることを認めてもらう必要があるのである。

また、県や市の社会福祉協議会などが行うボランティア表彰も、踊りと音楽は対象になりにくい。そのことに関してリンベルのメンバーは、「同じだけの年月と同じだけの実績があるのになぜ」と残念そうにすることがある。彼女らは、あくまでもボランティアグループと自認しているが、周囲からはいつもそのような理解を得られるわけではないのである。

リンベルの運営

リンベルは毎年、高岡市社会福祉協議会から3万円の助成を受けている。加えて、会費・研修費としてメンバー1人あたり9,000円／年を負担している。施設側やイベントの主宰者側から謝礼を受けることがあるが、この額は毎年変動する。これらの収入は、ミュージックベルや譜面台の購入、衣装の購入、指導者への謝礼などに使われる。

田中尚輝は「1980年代に入ってから、高齢者に対するボランティア活動に有償性の考え方がとり入れられるようになってきた」と述べる〔田中1994：122〕。一律の謝礼金を介した方が機能的な場合もあることがわかり始めたためであるが、一般に、有償で行われるボランティアは「有償ボランティア」、無償で行われるボランティアは「無償ボランティア」と呼ばれる。

リンベルが2010年に独自に行った市内の老健施設60施設を対象としたアンケート調査の結果によると（回収率100%）、ボランティアを「無償」としている施設が7割強であった。謝礼金のみを「有償」と見なすとすれば（その場で出されるお茶やお菓子は対象外）、リンベルが行うボランティアはこの調査結果をおおむね反映し、4分の3程度が無償ボランティアである。

謝礼金はすべて会の経費となり、メンバー個人が謝礼金を受け取る、もしくは何らかの形で謝礼金がメンバーに還元されるということはない。通常の練習を午前中に行い、同日の午後に訪問演奏に出かけるというパターンが多いが、その際の昼食代や移動の際の交通費などもメンバーらの自己負担である。

つまり、有償か無償かという差によって、メンバーらの経済的な負担に直接的な関係はないのだが、リンベルのメンバーは「有償ボランティア」を歓迎する傾向にある。このことについては後に詳しく述べたい（第2章）。

リンベルの練習

リンベルは現在、毎週1回（2時間）の練習を行っているが、ただ練習を積むという期間はない。常に、具体的なステージのために練習を行っている。少なくとも月に1度は依頼があるため、その度、60曲ほどのレパートリーの中から選曲する。季節感のある文部省唱歌や童謡、美空ひばりや坂本九などの歌謡曲、民謡などが中心であり、ミュージックベルだけではなくトーンチャイム（合金製のパイプをたたいて共鳴させる楽器）や数種類の打楽器も用いる。

リンベルのメンバーのほとんどは五線譜を読むことができない。結成当初は、指導者が毎回ホワイトボードに音名を書き、それを見ながら練習していたという。しかし、五線譜を読むことのできるメンバーEが活動に活発に参加し始めてから、パートごとの楽譜を使用するようになった。メンバーEが、それぞれの五線譜に蛍光ペンで印をつけた楽譜を作成するのである（たとえば「ド」のパートであれば、通常の音にはピンク、高いドには緑、低いドにはオレンジ）。もっとも蛍光ペンの印だけでは音符の長さ（8分音符、16分音符、4分音符、2分音符）まで表わすことができないため、メンバーらは徐々に音符の長さを見分けられるようになっていった。それでも難しいリズムなどがあれば、指導者がホワイトボードに書いて説明する。

担当の音が決まっているとは言っても、ミュージックベルという楽器の性質上、パートごとに練習を行うことはない（合唱などであれば、ソプラノ・アルト・テナー・バスのパートに分かれて練習を行うことがある）。したがって、各自が家に楽譜を持ち帰って練習するというものもない。

リンベルのステージ

老健施設から寄せられる依頼には、「1時間ほどお願いしたい」というものが多い。ミュージックベルの演奏のみで楽しんでもらえる時間としては長すぎるため、ミュージックベル以外の演出も取り入れている。先にも述べたように、メンバーはリンベル以外にも様々なグループに所属している。その経験を活かし、民謡をうたったり、簡単な体操や手あそびを行ったりする。その他にも、鳴子を手にちゃっさり節を踊ったり、紅白の旗を用意し旗あげゲームを行ったりすることもある。

訪問の際の衣装には数種類のパターンがある。当初は、本格的なドレスを2パターン揃えた。だが、ドレスを着るということは負担が大きい。よりカジュアルなものであれば、午前中の練習にすでに着て来られるし、靴も普段履きで良い。しかし、ドレスを着るとなれば、ドレスを持参し、そ

れに相応しいアクセサリも身につけなければならない。着用後はクリーニングにも出さなければならない。

そのため、よりカジュアルな衣装（おそろいのTシャツなど）を数パターン揃えるようになったが、「非日常」を望む施設の利用者や介護職員から「ドレスを着て欲しい」「スカートをはいて着て欲しい」と言われることも少なくなく、そうした要望には出来る限り応えている。

リンベルと指導者Z

クラシック音楽の経験がなくてもミュージックベルであればということから始まった活動ではあるが、自分たちだけでは向上も難しいと感じ、指導者を招くことにした。現在の指導者Zは3人めの指導者であり、彼女が指導を始めてから4年が経つ。現在のメンバーの平均年齢が68歳であるのに対し、指導者は20代でありメンバーからは「孫みたい」だと言われることもある。年齢の差はあるが、メンバーらは「こんなおばちゃんばかり教えるの大変でしょ〜」と言いながらも、「先生が若いから良い」とも言う。年齢の近い方が指導の際の遠慮がなくなり、上手くいかない場合もある。そういった点で、指導者Zはメンバーらと程よい距離を保っていると言えるだろう。

指導者Zは、幼少時からピアノを学び、大学でも音楽を専攻していた。大学院に進学中、Zの母が知人からリンベルの指導を依頼されたが、Zの母は日程の都合がつかなかったため、娘のZを紹介した。指導は月2回であるが、老健施設への訪問や各種イベントの際には指揮を行うために同行する。指導者Zは、引越などの諸事情により幾度かリンベルの指導を続けるのが困難になった時期があったが、最終的にはリンベルの指導を優先させ、4年間指導を続けてきた。

クラシック音楽の場合、指導者が生徒の演奏する曲目を選ぶことが多い。しかし、現在のリンベルでは、指導者Zの方が大半のメンバーよりリンベルの活動においては日が浅いということ、老健施設で喜ばれる曲目に関してはリンベルのメン

バーの方が詳しいということなどから、メンバーと指導者Zが相談して曲を選んでいる。アレンジが必要な場合（単旋律でものたりない、仏教歌のリクエストがあるためミュージックベル用にしなければならない、など）は指導者Zが行う。

リンベルはそもそもがB会を母体とした長年の活動の実績を有しているため、団体の運営自体に指導者がかかわることはない。指導者Zはあくまでも、演奏面での指導を行う存在である。

音楽ボランティアとしてのリンベル

以上がリンベルの基本的な情報であるが、リンベルは活発な活動を続けている団体であると言える。この背景には、音楽演奏を行うボランティア団体が珍しいという現状があると考えられる。音楽関連のボランティアの中でも、西洋的な楽器を用いる団体は富山県高岡市においても少ないが、全国的にみても比較的めずらしい団体であると言える。

1995（平成8）年の阪神・淡路大震災以降、ボランティア活動に参加する人が増加している。平成20年の社会教育調査ではボランティア登録者が過去最高となったというデータがあるように²⁾、ボランティアは現代の日本人にとって身近な活動である。総務省統計局によれば、ボランティア活動の行動者率数は「まちづくりのための活動」（道路・公園の清掃やまちおこしなど）、「自然や環境を守るための活動」（リサイクル運動）、「安全な生活のための活動」（防災活動や交通安全運動など）の三種が上位を占めている³⁾。

一方で、文部科学省は平成20年に、図書館・博物館・文化会館へのボランティア登録者数が過去最高であることを報告している⁴⁾。このデータは、博物館および美術館で作品解説や監視を行ったり、文化会館でチケット販売やコンサートの運営を行ったりする、「文化ボランティア」のニーズおよび関心の高まりを反映していると考えられる。しかし、文化ボランティアは主に、アートやコンサートをより普及させるためのメディエーターとして活動を指しており、ボランティア自身が

パフォーマーとなる活動は少数派のようである。

新聞などでは、クラシック音楽の演奏者が老健施設や福祉施設を訪問したという記事をよく見かけるが、彼／彼女らは普段からボランティアグループとして活動しているわけではない。ボランティア活動を前提として活動しているという点においても、リンベルはめずらしい団体であると言える。

しかし、フルタイムの仕事をもたないとは言え、活発な活動を10年間、維持してきたということは容易なことではない。この活動を支えているのは、どのような動機なのだろうか。仮に、「音楽」活動をしたいという気持ちなのであれば、また「ボランティア」をしたいという気持ちなのであれば、必ずしも音楽ボランティアである必要はない。事実、彼女らは個々に「音楽」や「ボランティア」のグループに加入している。つまり、「音楽ボランティア」でなければならない理由があるはずである。次章では、なぜ彼女らが「音楽ボランティア」の活動にこだわるのかということを明らかにし、音楽ボランティアの特徴を明らかにしたい。

2. 音楽ボランティア活動の特徴

2-1. リンベルのメンバーのやりがい

第1章で述べたように、リンベルのメンバーの多くはクラシック音楽の訓練を受けた経験がない。活動期間も10年に及び、徐々に慣れてきているとは言え、楽譜の蛍光ペンが間違っている間違ったに気付くほどではない。練習中に、同じ間違いを繰り返すことを不思議に思った指導者が楽譜をチェックして間違いが明らかになるということもある。また、同じ施設で毎回同じ曲目を演奏するわけにもいかないため、練習回数以上に本番の回数が多いい月もあり、練習が追いついていない状況もめずらしくない。

そういった点では、いわゆる「習い事」のように、一定の技術を身につけて次のステップに移行するといった技術の向上を実感するようなやりが

いを感じることは少ないと考えられる。毎年4月に行われるパート変えのときには「パートが変わったらわくわくする」という声、依頼続きで同じ曲目ばかりを練習していた後に新しい曲を練習し始めると「やっぱり新しい曲は楽しい」といった声があがるが、「いつも自信がない。じっくり曲を仕上げて、これが十八番！って言えるくらいにまで練習してみたい」という声が聞こえてくることもある。

それでも、彼女らにとっては「音楽」をやっているという意識が大きな動機になっているようで、その動機には主に2種類ある。1つは、クラシック音楽に携わっているということへの意識、もう1つは音楽にしかない力への信頼である。

リンベルのレパートリーには文部省唱歌や童謡、歌謡曲、民謡が多いが、ミュージックベルという楽器自体は西洋的な楽器である。そのため、ときに彼女らが自分たちをクラシック音楽のプレイヤーであると位置づけていると思わせられる場面に遭遇することがある。たとえば、あるメンバーが他のメンバーに、たまには勉強のためにクラシックのコンサートに行こうと呼びかけることがある。また、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤー・コンサートのライブ中継をみて、あこがれると言うメンバーもいる。この「あこがれ」は後に述べる「サロンコンサート」をめぐるエピソードで詳しく述べるが、クラシック音楽への漠然としたあこがれが動機になっているメンバーは少なくないと考えられる。

一方で、趣味的な活動であると見なされることで助成を受けにくいといったこととも無関係ではないと考えられるが、リンベルのメンバーらには、自分たちの活動が社会的に認められていないのではないかという気持ちがある。シーツ交換や高齢者の話し相手などのボランティアであれば、確実に助成を得られるという現実を知るメンバーが多いことを考えれば当然であろう。それゆえ、メンバーらは「音楽」を演奏することの意義に意識的である。

リンベルは2010年に、結成10周年を記念し、市

内の老健施設60施設を対象にアンケート調査を行った（メンバーと指導者がアンケートを直接手渡し、再び直接受け取りを行うという手法をとった。回収率は100%）。その際の項目には、施設についての基本的な項目やボランティアについての項目に加え、「音楽ボランティアは年に何回あれば良いですか?」「高齢者にとって音楽は必要ですか?」「ミュージックベルの演奏をきいたときの利用者の反応はどのようなものでしたか?」といった項目を設けていた。アンケートの集計結果について話し合っていたとき、メンバーらは音楽ボランティアに肯定的な意見が多かったことについて、「必要とされていることが嬉しい」「自分たちの活動が評価されたようで、誇りをもって今後も音楽ボランティアとして励もうと思った」などと感想を述べていた。

また、メンバーらの間で「音楽の力」が話題にのぼることがたびたびある。あるときは、メンバーの1人が、「表情には出てなくても、必ず心の中にはリアクションがあるはずだと思う」と言い始めた。「△△で、ずっとごはん食べさせられてたおばあちゃんが、突然かーっと目を見開いて（リンベルの）演奏中ずっとそのままだった。これが音楽だ!と思った」という。すると、「うちの近所で夏祭りがあったとき、痴呆になって、いつも何ごとにも知らん顔のおばあちゃんが手でトントンと拍子取り始めたことがあったよ」「やっぱりわかってるんだよね」「ほら、〇〇に行ったときも、いつも無反応っていうおばあちゃんが涙流し始めたときあったよね」と次々とエピソードが続いた。

このようにリンベルは、あこがれの「音楽」に携わることへの充足感を感じながらも、音楽ボランティアが社会的に認められる活動であるかどうかを常に自問している。その自問が同アンケートのボランティアが有償か無償かといった項目につながっていると考えられる。

有償ボランティアと無償ボランティア

リンベルが行ったアンケートには、「レクリ

エーションボランティア（演奏、手品、演劇、踊りなど）は有償ですか、無償ですか」といった項目が設けられていた。「ボランティア」が有償か無償かといった質問ではなく、「レクリエーションボランティア」に限られている点に着目したい。リンベルのメンバーは、助成申請のプロセスで音楽ボランティアだけでなく、一般的なレクリエーションボランティアが「趣味・習い事の延長」と見なされる傾向にあるということを経験として知っている。そのような傾向が、行政側だけではなく、施設側にもあるのかどうかを知りたかったのだ。

上記のように、リンベルのメンバーは施設の利用者の反応についてよく話し合う。訪問後はたいてい、反省会をしながら「〇〇は反応が良かった」「次はもっと△△みたいな曲を増やそう」などと意見を言い合う。しかし、実際にリンベルに依頼を行うのは施設の職員であり、リンベルのメンバーにとって、謝礼は施設側からのリアクションの一つと捉えられるのである。

ある施設に訪問に行った後、謝礼をわたされた。後日、会計が封筒を確認すると1万5千円が入っていた。ほとんどの施設からの謝礼は5千円、もっとも多額の場合でも1万円であったため、メンバーらは何かの間違いではないかと施設の関係者に問い合わせた。するとその施設から、ボランティアにはいつもその金額をわたしているとの回答があった。話し合いの結果、リンベルはその後2回、無償ボランティアとして訪問することをその施設に申し出る。レクリエーションボランティアであるリンベルが、他のボランティアと同じだけの金額をわたされた、つまり同等に評価されたという満足感を感じた。そこで、評価されたことへの謝意を演奏という形で表したいと考えたのである。

先にも述べたように、近年では有償ボランティアもめずらしくないが、リンベルはボランティアは無償で行うということを前提としている。しかし、ふとしたときに「交通費程度は請求しても良いのではないか」といったことが話題になること

があった。先にも述べたように、毎年、市からの助成も受けているため、活動を維持できないほど経済的に困窮したことはないのだが、活動を認めて欲しいという気持ちが、そうした発言に表れていると言えよう。

結成10周年記念アンケートをめぐって

その年によっても異なるが、リンベルの年間の出演回数はおおよそ20回である（平成22年度は24回）。筆者は2009年度に石川県の太鼓活動の網羅的な調査に関わったが⁵⁾、調査対象のアマチュアチーム152チーム中、平成21年度の出演回数が10回以上であるチームは49チーム、20回以上のチームは21チームであった（特定のホテルや旅館、観光協会と提携しているチームが多い）。リンベルのメンバーはフルタイムの仕事を持っていないという点で、融通を効かせやすいと言えるかも知れない。しかし、アマチュアの演奏回数としては多い方ではないだろうか。もちろん、リンベルの場合は、実際にボランティア活動を行わなければグループの存在意義が薄れてしまう。そのため、依頼があれば老健施設以外にも、どうしてもメンバーが揃わない場合やすでに予定が決まっている場合を除いて、可能な限り赴く。

実は、リンベルが実施したアンケートには、「営業」という側面があった。リンベルのメンバーらは、毎週のように依頼のステージがある時期や、1日に掛け持ちでステージをこなさなければならないときに、「私たち芸能人みたいだね」と言うが、彼女たちは「芸能人」でありそのマネージャーでもある。これまでのリンベルへの依頼は、各自が個別にボランティアの経験があるということもあり、友人や知人から依頼されることがほとんどであった。つまり、依頼を受ける施設が固定されていたのである。

しかし、メンバーらはより多くの人に演奏を届けたいと考えていた。アンケート調査の実施には、施設側のボランティアへの要望などを把握するとともに、より多くの施設に自分たちの存在を知ってもらおうという意図があったのである。実

際、アンケート調査後には、これまでに関わりのなかった施設からの依頼が増えた。「営業」というアンケートの意図は成功したと言える。

こうした、ボランティア活動の活発化の一方で、最近のリンベルにはまた別の動きが生じていた。

サロンコンサートをめぐる

高岡市の高岡市民会館にはホールサポーターを目的とするP会というグループがある。P会は「文化ボランティア」であり、会場設営や影アナウンス、ドアマン、もぎりなど、高岡市民会館で行われるコンサートの運営のボランティアを行う。また、P会は結成当初から、市民を対象とした無料のロビーコンサートを中心に10～15回、企画・開催している。コンサートの内容は、合唱団、三味線、大正琴、ピアノ、弦楽器と様々である。保育園の卒園コンサートとして開催されたり、奏者が県外から訪れたり、パフォーマーに出演の機会を与えるという点でも有意義な場となっているが、観客数が毎回100～200名という点でも、盛んな催しであると言える。

リンベルのメンバーの中にも、観客としてサロンコンサートに通うメンバーがいる。友人がP会の一員であるというメンバーもあり、誰からともなく「サロンコンサートに出たい」という意見が述べられるようになった。P会のメンバーから、「一度出てみたら」と声をかけられるということもあり、2010年にはサロンコンサートへの出演を具体化しようというメンバーが数人でてきた。「(サロンコンサートに)出るのが夢」という願望や、出るとすれば自分たちだけでは心もとないから別のグループと一緒に出てはどうかという意見に「出るからには自分たちが主役になりたい」「いつもは人のためにやってるけど、今回は自分たちのためにやりたい」という意見が述べられ始めたのである。

しかし、メンバーは賛成派と反対派にわかれてしまった。賛成派は、「サロンコンサートをレベルアップの機会にすれば良い」、「いつも本番に追

われて1曲1曲の完成度をあげることができないから、自信がつくまでじっくり曲を仕上げるのに良い機会」などの意見を述べる。一方、反対派は「最近の出演者はレベルが高い。私たちは出られるレベルではない」、「そんな大それた場に出るような立場ではない。恥ずかしい」と述べる。そして反対派の中には、普段はめったにリンベルの運営に意見することのない指導者Zがいた。

指導者Zは先にも述べたように、あくまでも演奏面の指導者であり、団体の運営にはかかわらない。また、メンバーらは「先生は優しい」と口を揃えるが、事実、演奏指導でも注意をしたり、きつい言葉をかけたりすることがない。そのZが反対意見を述べるということは非常に珍しいことであつたが、指導者Zは次のように述べた。「私はこのグループの本質はボランティア活動が続いているというところにあると思っています。確かにリンベルの演奏のレベルはサロンコンサートのほかの出演者のレベルに達しているとは言えないんですけど、そのこと自体はどうでもいいんです。ただ、これまで老健施設を向いてやってたみんなが、サロンコンサート（の方）を向いていくのだと思ったら……」。

指導者Zの経歴を踏まえると、サロンコンサートのようなステージの指導にこそやりがいを感じるのではと思われたため意外な感を否めなかった。指導者Zはクラシック音楽の専門的な訓練を受けている。一方、リンベルの指導では初歩的なことが中心である。たとえば、調性が変わるとミュージックベルを持ち替えなければならない場合がある（たとえばハ長調のときには「ファ」だが、ト長調になると「ファ#」）。その持ち替えをよく忘れるが、メンバーはたいがい気付かない。指導者Zが指摘すると、「やっぱり先生、耳いいね～」と感嘆の声があがる。どのベルを誰が持つか、そういったことに時間がかかるのである。しかし、指導者Zがリンベルの指導にこだわり続けてきたことには理由があった。

2-2. 指導者Zのやりがい

指導者Zは、母親がピアノ講師であったため、3才になる前から音楽教室に通っていた。地方国立大学に進学後は教育学部の音楽専攻として、4年間、クラシック音楽漬けの毎日を送ることになった。ピアノや声楽、管楽器、弦楽器、和声法、指揮法、音楽学、伴奏法、弦楽アンサンブル、合唱といった講義が中心であり、学内演奏会も年に2回開催される。学内演奏会は、学外で年に1度開催される演奏会のオーディションも兼ねている。学外演奏会は、将来、リサイタルなどを開催する際のノウハウを学ぶための教育の一環であり、外部のコンサートホールを借りて有料で行う。そのような演奏の機会のために、音楽専攻の学生らは学外で個人レッスンを受けるのが普通であった。また卒業時には、卒業演奏会に出演しなければならない（卒業論文の単位が卒業演奏に振り返られる）。教育学部への所属ではあるものの、演奏技術を向上させるということが、大学生活の中心とならざるを得ない。

指導者Zも例外ではなく、学外の指導者のもとへ個人的にピアノと声楽のレッスンに通っていた。偶然ではあるが、どちらの指導者もドイツ留学の経験があり、指導に熱心であったという。指導者Zも自身の演奏レベルの向上は当然、目指すべき事柄であり、そのこと自体に疑問を持っていたわけではなかった。しかし、「いつも自信がなかった」という。

学内オーディションで選出されて学外での演奏会に出演しても、地元のアマチュア・オーケストラから依頼を受けて出演しても、気になるのは観客の反応よりも指導者の言葉だった。「クラシックのコンサートは、観客の反応がわかりにくい。拍手もタイミングが決まっているし、客席も薄暗くて表情も見えにくい。それに、出演する機会なんて年に1、2回で、普段は自分の世界。自分と先生の世界。先生の言葉だけが気になっても当然だったのかも知れない」。

コンサートのチラシやプログラムなどには必ず「〇〇に師事」というクレジットが必要であるが、

そうした場合にはやはり「先生の恥になってはいけない」という意識がはたらく。そうした個人と個人の師弟関係が基盤のクラシック音楽の世界で活動するうちに、指導者Zは自分が音楽と関わっているのはなぜかと自問するようになった。

リンベルと出会ったのは、大学を卒業し、大学院に進学した後である。あるとき、リンベルのステージを見学に行った。そのときの感想をZは次のように述べる。「びっくりしました。いろんな意味のびっくりなんですけど。たとえば私たちは、相当レベルじゃないと人前で演奏するなんて、と思っている。でもリンベルのみんなは演奏のレベルなんて気にしていない。それで堂々とステージにたって、ちゃんと喜ばれている。それに、ドレスを着て演奏する人たちがこんなに（お客さんを）笑わせるっていうことにもびっくりです。とにかくトークでも笑わせるし。私は演奏するとき自分のことしか考えてなかった、自分が先生にどう思われるかってことしか考えてなかったって気付いたんです。リンベルのメンバーはお客さんのことしか考えていない。そこに一番びっくりしたんだと思います」。

インタビューを繰り返すうちに、指導者Zのリンベルに対する「びっくり」はいくつかの側面があることがわかった。その「びっくり」はクラシック音楽の世界で育ってきたZの価値観が、「ボランティア」グループであるリンベルによって揺るがされていくプロセスであった。

指導者Zの価値観の変化

老健施設への訪問後、施設の職員が控え室にお茶を用意することがある。お茶を飲みながらのリンベルのメンバーの話題は終えたばかりの演奏のことであるが、話題の中心は「やっぱり〇〇やって良かったね。一緒に歌ってもらえて」「次は〇〇みたいな曲、増やそうか」「職員さんに何回もありがとうって言われたわ～」など施設の利用者や職員の反応である。指導者Zは「うらやましい」と思ったそうだ。「私が演奏の後に考えることって、あー、あの音の出し方、先生に注意されてい

たのに出来なかった、とか、こんな演奏をしてしまっ
て先生に申し訳ないとか、そんなことばかりで、や
りがいを感じることができなかった。リンベルの
みんなは、演奏のたびに直接アクションをもらっ
てやりがいを感じているんだと思うとうらやまし
かったし、自分の演奏がどうかなんて考える前に、
とにかく外で演奏するという姿勢に尊敬を覚まし
た」。

指導者Zは他にもリンベルを尊敬している点があ
るという。それは、「お客さんのためだったら手を変
え品を変え何でもする」というリンベルの方針であ
る。先にも述べたように、リンベルは旗あげゲー
ムを導入したり、ちゃっきり節を踊ったり、「とにか
くサービス精神旺盛」である。「だから私は別に、
クラシックのコンサートでちゃっきり節を踊れば
良いなんて思ってるわけじゃないんですけど、ただ、
こういうやり方もあるんだと思ったんです」。

そして、そのことが社会的にも認められている、
つまり謝礼の対象となっているということにも指
導者Zは驚いたという。

クラシック音楽と経済

クラシック音楽のプロの演奏家として活動でき
る人はかなり限られている。W. ボウモル & W.
ボウエンがすでに明らかにしているように、クラ
シック音楽は市場原理になじまない [ボウモル &
ボウエン1966]。プロのオーケストラのメンバー
であっても、アルバイトや個人レッスンなどの副
業を持つ人が多い。ましてアマチュアとなれば、
人前で演奏をする場合は規模に関わらず、経済的
な負担を覚悟しなければならない。自らが企画・
開催するリサイタルなどであればその負担はかな
りのものであるが⁶⁾、仮に自治体や文化財団など
が主催するコンサートへの出演であっても多くの
場合はチケットを何十枚単位で買い取らなければ
ならない。指導者Zも演奏でお金を稼いだことな
どなかった。しかしZはこのことについて、一流
の演奏家でない限り、当然のことであり疑問に感
じたこともなかったと言う。

一方、リンベルのメンバーらは、メンバー個人
としての経済的な負担はあるが（会費、交通費、
衣装代など）、会としては謝礼を得ることがある。
Zは、「人が演奏にお金を払おうと思うのは、必ず
しも一流の演奏だけじゃないんですね。施設の方
にとっては、利用者さんだけじゃなくて、大変な
お仕事をされている職員の方にも、外部から人が
来るということが、緊張の緩和になったりするん
ですよ」という。リンベルのメンバーにとっても
施設からの謝礼というのは、金額以上に「認め
られる」という気持ちをもたらすようであるが、
指導者Zにとってもそのことは新鮮な驚きであっ
た。「別に、お金をもらえば良いっていう単純な
ことではないんですけど、そうした形で需要があ
って感謝されるということ、そのことに、これ
まで私が知っている世界とはまったく違う音楽の
活かされ方を見た気がしました」。

指導者Zのサロンコンサートに対する考え方の変化

しかし、指導者Zがリンベルから学んだもっと
も大きな事柄は、「観客とのつながりを最優先さ
せていること」だという。それゆえZは、サロン
コンサートに出演することでその方向性が変わっ
てしまうのではないかと危惧した。Zは、サロン
コンサートへの参加に賛成できなかったときの気
持ちを「クラシック音楽に限らずいろんな音楽の
演奏家はたくさんいるけど、リンベルのような活
動をする団体は珍しいし、そこがリンベルの長
所。その長所がなくなってしまうように感じて賛
成できなかった」と述べた。

しかし、その後、ふたたびサロンコンサートの
話題になったとき、メンバーの一人の「（こんな
レベルで出るのは）恥ずかしい」という言葉に指
導者Zは次のように意見を述べた。「音楽に恥
ずかしいとか、恥ずかしくないとか、そんな判断
の仕方はないと思う。リンベルにこれだけの実績
があって、時間と身体を使ってこれだけの活動
をしているんだということをみせればいい」。

指導者Zはリンベルと活動を共にするうちに、
考え方が変わってきたのだという。クラシック音

楽の演奏者は、多くの時間と労力を自身の演奏技術の向上に費やすが、よほど認められたプロでなければそれを発信する機会を多くもたない。しかしそうやって温存していても、誰にも何ももたさない。リンベルのメンバーをみると、自分たちで自分たちをプロデュースしながらマネージメントもする。そうしたたくましさや、どのような場であれ、演奏という形で示すことは大切なことだと思ふようになったというのである。「ほとんどが素人の集まりでも、利他的な考え方のもと、やる気があればここまで出来るということや、市民の皆さんに知ってもらえれば良いと思っています」。リンベルは、2011年の夏にサロンコンサートに出演することが決まった。

2-3. 「音楽ボランティア」として活動することの必然性

リンベルのメンバーらにとって音楽ボランティアは、あこがれの音楽に携わっているという充実感と共に、施設の利用者や職員とのやり取りにやりがいを感じることでできる活動であると言える。どちらか一方であれば、習い事やその他のボランティア活動で満たされるはずであるが、その双方が満たされるためには音楽ボランティアという形態が必要である。リンベルのメンバーからは、「もっと利用者と一緒に音楽をしたい」という声があがることがある。老健施設には認知症の利用者も多く、「一緒に音楽」を実現するためには、個別の施設とその利用者について詳細な知識が必要になる。多数の施設を訪問しているリンベルには、そのような準備を行う余裕はないが、メンバーらが「もっと一緒に」という気持ちを強く持っていることは事実である。10周年記念アンケートの項目には、「利用者と演奏は可能ですか」という項目が設けられていた。

指導者Zもまた、音楽ボランティアでしか得られないやりがいを感じている。Zは演奏技術の向上に終始することから解放されて、自身の経験が生かされる場を得た。Zは、幼い頃からクラシック音楽に携っていたものの、リンベルの活動を通

じて初めて自身の音楽経験が社会に役立っているという実感を得たという。相当のレベルではないと人前で演奏してはいけないという気持ちが、どのようなレベルの演奏であっても喜んでもらうことはできる、またそうした活動が必要であるという気持ちに変わった。

「結」ではこれらを手がかりに、直接的な関係を前提とする音楽ボランティアの活動と、従来からのパターンリズムの根幹にあるクラシック音楽観・芸術観との間のギャップについて考えてみたい。

結

ノルウェーの音楽療法士、B. スティーゲは「ハイ・アートの伝統と、アートや音楽づくりのオルターナティブな伝統には価値が分裂しているように見える」と述べた〔スティーゲ2008:99〕。一方に、ハイ・アートを自律的で恵まれている限られた個人のものと捉える考え方があり、一方に、他律的ですべての人に開かれているもののはずであると捉える考え方があるというのである。スティーゲは、自身の述べる価値の分裂を以下のような表として提示している〔ibid〕。

【表1：B. スティーゲ『文化中心音楽療法』より】

「ハイ・アート」の価値	「オルターナティブ」の価値
芸術は自律的 (autonomous) である。つまりそれは日常生活とは別の「領域」に属する。(①)	芸術は他律的 (heteronomous) である。つまりそれは私たちの日常的な経験と密接に結びついている。(①')
芸術は完璧な形式か、あるいは少なくとも均衡のとれた形式を持つ。(②)	形式においては未熟であっても、自発的要素が最も重要である。(②')
芸術は技術的に進歩したものであり、創作者、パフォーマー、受容者には高度の専門能力が要求される。(③)	技術的な熟練よりも個人の表現が重要である。専門能力のレベルは各個人の能力や資質に合わせて求められるべきである。(③')
芸術は個性と結びついたものである。つまりそれは個人により生み出され、個人によりじっくりと受容されるべきものである。(④)	芸術は社会的な現象である。つまりそれは相互作用であり、コミュニケーションであり、コミュニティである。(④')
芸術は恵まれた少数者のためのものである。(⑤)	芸術はすべての人のためのものである。(⑤')

* 通し番号は便宜上、筆者が挿入

本論文で述べてきたリンベルは「オルターナティヴ」の価値観に該当する部分が多い。実際にはこの表のように簡潔に割り切ることのできない側面もあるが、リンベルの活動から浮かび上がってきた事柄のなかで、特に顕著な項目①・①'、③・③'、④・④' について両者の価値観の違いを記述する。

芸術は自律的か他律的か：【表1】項目①・①'より

まず、【表1】の芸術が自律的か（項目①）他律的か（項目①'）という点について考えたい。踏まえておきたいのは、音楽療法における考え方である。音楽療法では、使用する音楽をクラシック音楽に限定しているわけではないが、日本音楽療学会から療法士として認定されるためには音楽実技として、一定以上のピアノの演奏能力が求められる（クーラウ、クレメンティ、モーツァルト、ベートーヴェンのソナチネやソナタ）。また、移調や調性判定、和声記号などが含まれる楽典の筆記試験も行われる。音楽大学や国立大学教育学部音楽専攻の入学試験ほど困難なものではないが、一定以上のクラシック音楽の技術が求められる。音楽大学（国立音楽大学、東邦音楽大学、昭和音楽大学など）に音楽療法専攻コースが設けられているという事実は、そのことを如実に表わしていると言えよう。

しかし、音楽療法のあり方そのものは「オルターナティヴ」な価値に該当する。象徴的であるのは、日本音楽療学会のホームページ⁸⁾の「進学を目指す高校生の皆さんへ」というコーナーに「音楽を愛し、さらに「人」と直接関わることに興味があるあなたには音楽療法士への道が待っています」と謳われていることである。この表現は、いかに従来のクラシック音楽のシーンにおいて「人と直接関わること」が少ないかわかるが、「療法」であるからには、医者と患者、カウンセラーとクライアントのように、「直接関わる」ことが前提となる。

リンベルが活動を開始したのは、1999（平成11）年である。音楽療法士の認定制度が始まったばか

りの頃であり、詳細については曖昧ながらもリンベルのメンバーらは「音楽療法」という言葉を知り及んでいた。日本音楽療学会のホームページのトップページにも、音楽療法とは「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」と記されているように、「療法」であるからには目的にもとづいて計画的に音楽を用いることが求められる。それゆえ、リンベルの活動が「療法」に足るものでは当然ないものの、リンベルのメンバーは自分たちの活動を「音楽療法的なもの」と捉えていた。

メンバーの中には、リンベルの活動を始める以前から、民謡やカラオケ、和太鼓、コーラス、ピアノなどの習い事を続けているメンバーも少なくない。「習い事」の場合、発表会などが行われるとしても年に1、2回程度であり、自身の歌唱力や演奏力の向上が目的となる。一方、「リンベル」の活動は当初からボランティアとして訪問を行い、できるだけ施設に赴くことを目的としていた。そうした点において、リンベルのメンバーは自身らの活動を「音楽療法的なもの」と捉えていたのである。指導者Zがリンベルを「尊敬する」と述べていたのは、まさにこのリンベルの活動の他律的な側面であった。

芸術のパフォーマーには高度の専門能力が要求されるかどうか：【表1】項目③・③'より

次に、項目③・③'の芸術のパフォーマーに高度な専門能力が要求されるかどうかという点について考えたい。表には「受容者には高度の専門能力が要求される」（項目③）とあるが、クラシック音楽のコンサートではこのことは当然であると認識されている。最近のコンサートホールには、携帯電話や飲食のマナーだけではなく、拍手のタイミングを指示するポスターが貼られていることもある。このことは芸術が、「日常生活とは別の「領域」」（項目①）であるために必要であるが、リンベルのメンバーは当然、施設の利用者らにそう

いったマナーは求めない。

先にも述べたように、リンベルのメンバーらは「たまには良い音楽をききに行こう」と明らかにクラシックの演奏者をお手本と意識するような発言をする。しかし、彼女たちは必ずしも「高度の専門能力が要求される」とは感じていない。仮にそのように感じているとすれば、完成度が高まるまで練習するだろう。しかし、実際には少しでも施設の利用者の関心をひき出すために、季節感のある曲や、反応の良かったジャンルなどへと次々に曲を変更している。また実力が充分ではないと思えば、依頼があっても断るはずである。

もちろん、施設の利用者からいつも良い反応が得られるとは限らない。老健施設の利用者は、要介護認定⁷⁾で要介護2～5と判断されている利用者が多い。要介護5は生活全般にわたって介護が必要であり、意志の伝達がほとんどできない場合であるが、要介護4以下であっても認知症である利用者が少なくない。当然、受容者に「高度の専門能力」などは期待されない。しかしリンベルは、「芸術社会的な現象である。つまりそれは相互作用であり、コミュニケーションであり、コミュニティである」(項目④)という意味においての「コミュニケーション」を大切にしている。

芸術はコミュニケーションか：【表1】項目④・④'より

【表1】の「ハイ・アートの価値観」には「芸術は個性と結びついたものである。つまりそれは個人により生み出され、個人によりじっくりと受容されるべきものである」(項目④)とあるが、この価値観はパターンリズム——ある天才が生み出した良いものを多くの人に——の根本をなすものでもある。こうした捉え方は、文化行政の方針などだけではなく、クラシック音楽に携る個々にも内化されているのではないだろうか。指導者Zの発言にも、そうした価値観が現れていた(指導者Zは自分の演奏が人々に与えられるべきものではないと考えていた)。しかし、リンベルのメンバーらの多くが、クラシック音楽には携ったこと

がなかった。そのため、そうした先入観がなかったのだろう。

クラシック音楽では、楽譜を忠実に再現することが重んじられる。楽譜とは異なる演奏が、卓越した個性により芸術をうみだした作曲者への冒涇と非難されることも珍しくない。だが、リンベルのメンバーは、たとえば曲の出だしが揃わなかったときに、「ごめんなさい、もう1回、初めからやります。私たち、緊張して。皆さんも(私たちが)心配でしょう」などと言い、利用者らを笑わせたりもする。また、リンベルのメンバーが一人ひとり自己紹介をすることもあるが、「奏者－観客」という匿名性の高い関係から一歩踏み込みたいという気持ちの現れであろう。

また、リンベルのメンバーは、Zがそうであったようにステージの後の指導者Zの反応を気にかけることはない。どれだけ利用者が一緒に歌ってくれたか、どれだけ手拍子をしてくれたか、どれだけ身を傾けてきてくれたか、そういったことでステージの出来・不出来を顧みる。あるとき、多くの利用者がミュージックベルに合わせて歌を歌いだしたことがあった。そのとき、指導者Zが嬉しそうににこにこしながら、利用者の方を振り返り、利用者に向かって身振りで「もっと一緒に歌ってください」と呼びかけた。ステージが終わり控え室に戻ると、メンバーらは一斉に「先生、今日のあの指揮良かったよ!」「本当に!あれいいわ〜」「次からもそんなふうにされたいと思うよ」などと声をかけた。リンベルのメンバーらがいかに、利用者とのかわりに重きを置いているかがわかるエピソードであろう。

このような捉え方は、指導者Zを含め、クラシック音楽を専門として学んだ立場の演奏者や教育者にはなじみのないものであると考えられる。C. スモールは繰り返し、音楽は「音楽」という名詞形では捉えきることができないと述べたが[Small1998]、読譜能力を前提とする現在の音楽プロパーの教育形態では、音楽＝楽譜という観念は強い。自身の演奏技術と向き合うということは、ある程度は楽譜と向き合うということに等し

い。そうした観念が、リンベルに出会う前の指導者Zがそうであったように、音楽が必ずしも不特定との関係を基盤としないという想像を遮っているということも考えられるだろう。

ミュージック 音楽からミュージッキングへ

ある音楽療法士が、療法の前後に生活実感聞き取り調査を行ったところ、「病状そのものをクライアント個人のものとせず最も心的距離の近い他患とのコミュニケーションを図り、互いに受容・共感する場となった」という副次的な効果があげられた[小林・岡部2006:83]。この結果は、療法の直接的な結果ではなく、音楽のある場に人が集まったということから生じたものである。

また、深川富美代は、福岡女子短期大学音楽療法コース在学学生を音楽療法ボランティアセッションに参加させるという課外活動を試みている。深川は、「音楽療法を志す学生は、これまでの数年、もしくは十数年間、音楽を演奏することを学んできた者である」こと、また学生の「作曲家の想い、演奏者の想い、その音楽をいかに表現するか、という音楽の送り手側からの表現力の向上、といったことに力を注いできた経緯」を指摘し[深川2003:59]、「これまで自分の演奏力向上を中心に音楽を学んできた学生にとって、音楽療法の実践に際しては対象者のために音楽を活用する、という意識をもつことが重要」であると述べた[深川2003:57]。注目したいのは、音楽療法ボランティアセッションに参加した後、「歌唱、伴奏などの練習に目的意識が生じ向上する学生が多い」という結果である[深川2003:62]。

このことは、音楽を学ぶ学生が、普段いかに具体的な「目的意識」を持ってないまま自身の演奏と向き合っているかということでもある。指導者Zも「いつも自信がなかった」と述べていたが、具体的な目的と達成感がなければ、自信の持ちようもないと言えよう。

宮本直美は、公的な文化の助成に見られるパターンリズムは、19世紀のロマン主義に形成過程が見られる「価値観——芸術の神話とも呼ぶべ

きもの——に基づいていると考えられる」と述べる[宮本2008:51]。神話には、「孤高の芸術家＝天才」といったイメージ、また「文化は魂にとって良いものである」という観念論的・人文主義的立場」などがあげられるが[ibid]、こうした考え方からは「芸術」は限られた一握りの天才がその他の一般市民に分け与えるものという図式が浮かび上がってくる。公的な助成は長い間、その図式を補強してきた（文化ボランティアも場合によってはそうした図式の一部となる）。そして、その図式においては「天才」でなければ分け与える側になることはできない。指導者Zもそう思い込んでいた。分け与えられることのできる「天才」以外のパフォーマーを一様に、趣味・習い事の範囲と見なす態勢もまた、こうした神話から生じているのではないだろうか。

本論文で追ってきたリンベルの事例や、音楽療法の事例、深川の試みの事例を取り巻くエピソードは、神話と実際との溝を示すものであろう。これらの事例は、「美」の形成を目的にするものではなく、また文化や伝統のような地域的なアイデンティティに結びつくものでもない。しかし、「序」で述べたように、文化や伝統がその求心力ゆえに重視されていると見なすとすれば、音楽療法や音楽ボランティアといった事例もまた、音楽を通じて人々が関わり合うことができるという意味では共通している。

スモールは、「すべてのミュージッキングは
シリアス
真剣なミュージッキング」であり[スモール1998:212]、「万一その善し悪しを判断する必要があったとして、それは参加している人びとの関係性の概念がどれほど首尾よく表現（探求、確認、祝賀）されているかという点でなされるべき」と述べていた[ibid:213]。「ミュージッキング」は「音楽」の動詞形として彼が提言する用語であるが、スモールはどの音楽かではなく、人々がいかに、それぞれのミュージッキングにコミットメントできるかどうか重要だと述べているのである。

政策や教育の対象が、クラシック音楽から文化・伝統へ上げられたことによってあらゆる文化

が相対的に扱われているといった印象を受ける。しかし、それら以外の音楽活動が一樣に「趣味」と割り切られてしまう現状を鑑みると、パターンリズムの観念の再考が求められるのではないだろうか。

[注]

- 1) 事実、数年間、車椅子のメンバーが所属していた。
- 2) 文部科学省ホームページ
<http://www.mext.go.jp/>参照。
- 3) 総務省ホームページ<http://www.soumu.go.jp/>参照。平成13年の社会生活基本調査を平成15年に「社会生活基本調査トピックス」として発表したもの。
- 4) 注3)に同じ。
- 5) 木越治・野澤豊一・西島千尋ほか、2010、『いしかわ太鼓まつぷ2010』金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第5集，金沢大学人間社会研究域
- 6) 指導者Zの身内がピアノのリサイタルを開催した際は100万近くの費用がかかったという（貸館料，ピアノ調律，プログラム・チラシの作成，スタッフへの謝金など）。
- 7) 被保険者が介護を要する状態であることを保険者である市町村が認定する制度。要介護1～5の5段階で判断される。
- 8) 日本音楽療法学会<http://www.jmta.jp/>。

引用文献

- 愛川フォール紀子，2010，「2009年度公開学術講演，文化遺産の「拡大解釈」から「総合的アプローチ」へ：ユネスコの文化政策にみる文化の「意味」と「役割」『Seijo CGS Working Paper Series』4，成城大学民俗学研究所グローバル研究センター，pp. 1-29
- 岡部多加志・小林俊恵，2006a，「アルツハイマー型認知症の音楽療法」『バイオメカニズム学会誌』30-2，pp. 71-76
- 小林俊恵・岡部多加志，2006b，「パーキンソン病患者への音楽療法」『バイオメカニズム学会誌』30-2，pp. 77-84
- スティーゲ，ブリュンユルフ，2008，『文化中心音楽療法』阪上正巳監訳，井上勢津・岡崎香奈・馬場

存・山下晃弘訳，音楽之友社

- 田中尚輝，1994『高齢化時代のボランティア』岩波書店
- 西浜稔，1991，「演奏会」『音楽大辞典1』平凡社，p. 258-259
- 深川富美代，2003，「福岡女子短期大学音楽療法コース在学生による音楽療法実践活動の試み」『福岡女子短大紀要』62，pp. 57-65
- ブラッキング，ジョン．1978，『人間の音楽性』徳丸吉彦訳，岩波現代選書
- ボウモル，ウィリアム．&ボウエン，ウィリアム，1966 [1994]，『舞台芸術——芸術と経済のジレンマ』池上淳・渡辺守章（監訳），芸団協出版部
- 美山良夫，1998，「アート・マネジメントにおける文化ボランティアの意味」『Booklet』3，pp. 4-20
- 宮本直美，2008，「文化政策における「芸術」と「ポピュラー文化」」『季刊家計経済研究』79，pp. 47-54
- メリアム，アラン．1980 (1963)，『音楽人類学』藤井知昭・鈴木道子訳，音楽之友社
- 八木康幸，1994，「ふるさとの太鼓：長崎県における郷土芸能の創出と地域文化のゆくえ」『人文地理』46(6)
- ローマックス，アラン．2007，『アラン・ローマックス選集——アメリカン・ルーツ・ミュージックの探究1934-1997』ロナルド・D・コーエン編，柿沼敏江訳，みすず書房
- Goodman, Nelson. 1976, *Language of art : an approach to a theory of symbols*, Hackett Publishing Company
- Small, Christopher, 1998, *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*. Wesleyan University Press (野澤豊一・西島千尋，2011，『ミュージッキング (仮)』水声社 (近日刊))

付記

快くご協力くださったリンベルの皆様にご感謝申し上げます。ありがとうございました。